

# 28PA-am368

早期体験学習における不自由体験の教育効果について

○和田 哲幸<sup>1</sup>, 小野田 良<sup>1</sup>, 山下 由依亜<sup>1</sup>, 中村 武夫<sup>1</sup>, 伊藤 栄次<sup>1</sup>, 松野 純男<sup>1</sup>, 大内 秀一<sup>1</sup>, 八軒 浩子<sup>1</sup> (<sup>1</sup>近畿大薬)

【目的】薬剤師として求められる基本的な資質の中に、「常に患者・生活者の立場に立って、これらの人々の安全と利益を最優先する」と記されている。今回、障害者および介護者を疑似体験する不自由体験学習を通して、薬剤師としての使命感や倫理観および患者や障害者に対する配慮に関する意識の変化について検討した。

【方法】薬学部1年生を対象として、2016年度および2017年度に早期体験学習の一環として不自由体験(車椅子体験・視覚障碍体験・高齢者疑似体験)を実施した。参加学生に対し、自記式無記名アンケートを観察後に実施し、それぞれ164名および150名より同意・回答を得た。アンケートの解析と学生より提出されたレポートを基に多変量解析を行った。【結果・考察】本体験学習実施以前に2016年度では80名が2017年度では78名が不自由体験を経験していた。「電車・バス等の車内で不自由を感じておられる方に席を譲るか」については、体験学習前、「必ず席を譲る」と答えた学生は両年度とも約20%であったが、体験学習後は、70%を超える学生が「必ず席を譲る」と回答した。また、「薬学生のヒューマンズ教育に対する学習意欲向上に役立つか」については、約90%の学生が役立つと回答した。共起ネットワーク分析の結果、両年とも「体験・車椅子・不自由・耳・目」など体験を示すグループが形成された。対応分析の結果、2016年度は体験を通して「高齢者をはじめとする体が不自由な方の気持ちを理解」する共感的理解が、2017年度は体験を通して、「ドアを開くことが困難、恐怖を感じるなど実体験に即した現状を理解」する身体的・心理的理解へ変化がみられた。今回の不自由体験は、学生の到達度に個人差はあるものの、ヒューマンズ教育の初段階と医療の担い手となる基本的な資質を身につける動機付けができたと考える。